

世界トップの頭脳は、おやつで活発化する！

ティータイム、それが新しい発見を生む

千葉県柏市にある世界トップレベルの研究所「カブリ数物連携宇宙研究機構」
そこには義務化された日課がある。午後三時からのティータイムへの参加だ。
お茶とおやつに、なぜそれほどまでに重要な役割があるのか？
ティータイムのひとつときが生み出すものとは。

カブリ数物連携宇宙研究機構 機構長

大栗博司

●おおぐり・ひろし 1962年生まれ。物理学者。ウォルター・パーク理論物理学研究所初代所長。2018年からKavli IPMU 機構長。理論物理学における業績に対し紫綬褒章、アメリカ数学会アイゼンバッド賞などを受賞。

唯一無二の義務

——出勤、退勤時間も決まりがないにもかかわらず、唯一、ティータイムの出席は義務になっていると伺いました。

そうです。「カブリ数物連携宇宙研究機構（※以下、Kavli IPMU）」は、海外や別の研究所出張

している人もふだん多いのですが、少なくともKavli IPMUに出勤している研究員は、午後三時から三時半のティータイムにはフロアに下りてきて、お茶やお菓子を楽しまながら、みんなと交流するというのが唯一の義務になっています。研究者選考の際、オフィレーターを書くのですが、そこにも「唯一の義務はティータイムへの参加」と書いて

ありますよ。

——ティータイム導入のきっかけと

まずは、この研究所の成り立ちから説明しましょう。「カブリ数物連携宇宙研究機構」と、ちょっと難しい名前がついていますが、「宇宙の最も深淵な謎を解こう」——これが研究所のミッションです。現在、百人ほどの常勤の研究者がいて、その



Kavli IPMUのティータイム風景。「おやつ」を通じた研究者の交流が最先端の“知”を後押しする

※東京大学 国際高等研究所 カブリ数物連携宇宙研究機構 (KAVLI INSTITUTE FOR THE PHYSICS AND MATHEMATICS OF THE UNIVERSE) 文部科学省世界トップレベル研究拠点形成促進プログラムに採択され、東京大学をホスト機関として2007年10月に発足。2011年1月には東京大学国際高等研究所が設立され、IPMUが最初の研究機構として認定された。2012年4月、東京大学が米国カブリ財団による寄附を受けたことで、カブリ数物連携宇宙研究機構 (Kavli IPMU) に。約100名の常勤研究者が在籍。他機関に所属する連携研究者を含めると、国内外約300名の研究者が研究を行っている。

うち半分は海外からの研究者。内訳は三分の一アメリカ、三分の一ヨーロッパ、三分の一アジアからですね。国際色豊かです。

もともと日本では、素粒子物理学の研究分野が進んでいました。湯川秀樹、朝永振一郎をはじめ、小柴昌俊、梶田隆章などの諸先生方が、ノーベル賞を受賞しています。

ですから日本で、世界トップレベルの物理や天文学の研究所を設立するのは自然な流れだったのですが、数学も巻き込んで、数学の研究もさらに盛り立てようというアイデアが出てきたんです。世界的にみても物理・天文学・数学の三つの学問を融合させようという試みはそんなに多くはありません。

ちなみに「機構」とは、いくつかの研究所が集まったものを指します。Kavli IPMUでは数学、物